2023年8月27日発行

聖アンデレ教会　教会報

さかえ

第　379　号

日本聖公会東京教区　聖アンデレ教会
〒105-0011　東京都港区芝公園3-6-18
TEL 03-3431-2822　FAX 03-3434-5698
www.st-andrew-tokyo.com

発行人：牧師 司祭フランシス下条裕章
編集人：エレミヤ大岡 祐一朗
ヨハネ 柳生 義人

平和を造る人々は、幸いであるその人たちは神の子と呼ばれる（マタイによる福音書　5:9）

司祭 フランシス 下条裕章

夏の声を聞くと、平和への思いを新たにしなければと思うのは、きっとわたしだけではないと思います。日本は、平和・和合のためとして、数十年前に国家を挙げて戦争に邁進し、私たち国民の多くはそれに協力し、あるいは命を傷つける罪の姿に目を向けてそれを止めようすることはほとんどできませんでした。そして戦後も、根本的な和解と平和の実現、差別の原因の解消にいたることなく、なお多くの傷と痛みを感じつつ今日を迎えています。一九九六年に「日本聖公会の戦争責任に関する宣言」により反省を明らかにしましたが、なお今も命を傷つける事実にきちんと目を向けることができないでいる私たちでもあるかもしれません。私たち教会がまた一人ひとりが、日々の生活のなかで見聞きし、心を向け、また心開いて、命について語ってゆくことができますよう、これからも祈念し、励んでゆきたいと思います。

さて、このようなことを私が語るのは、大切な一人の師との出会いがあったからです。大学に入学するため上京した私は、池袋聖公会に籍を移して、その仲間に加えていただきました。当時管理牧師は竹内寛司祭、そして牧師館には八木立三執事がお住まいでした。戦争の体験を持たれる信徒の方はまだ多く、このお二人の先生方も同様でした。八木執事は特に、当時教会に集っていた青年たちにご自身の戦争の体験を、深い痛みと反省をもって語り続けられる方でした。信徒として聖公会の施設や教会の創立に大きく寄与され、還暦を迎えるころ、教会の奉仕職としての召命を受けて献身されました。浅草聖ヨハネ教会、池袋聖公会で教役者として奉仕され、牛込聖バルナバ教会でお働きのうちに神さまのもとに旅立たれた方です。

夏になると彼は、悪夢に悩まされていました。戦場で、彼のこめかみに銃口を向けて命令する上官に抵抗しきることができず、自らの命を守ろうと、スパイとしてとらえられた人の身体を傷つけざるを得なくなった。その恐ろしすぎる瞬間のことを夢に見て。そして、自らの、人の弱さ、傷つき易さ、さらに組織や社会の生み出す暴力と支配への抵抗の難しさとその怖ろしさに震えて汗し、懺悔の思いに目が覚めると。

彼は生涯折々に、軍隊や戦地での経験と悲しさ、その暴力と差別性を語り続けました。八月十五日には朝、誘い合って千鳥ヶ淵を訪れて祈り、夜は教会に集まって敗戦記念日の平和祈祷会を開いて、戦争の悲惨と平和の大切さを訴えて止むことはありませんでした。特に、日常の生活が「普通」に送られている時にこそ、どのように祈り、語り、生活するかということが大切だと繰り返されました。

それまで当たり前だったことがそうではなくなった時、例えば「それまで路面電車のなかで帽子をかぶっていても何も問題はなかったのに、ある時を境に、皇居の正門前を通過するときは帽子を脱がなければならなくなった。そしていつしか、その場での着帽が不敬として官憲にとがめられることとなっていった」。思えば、そんな日常の変化を見落とすことが、平和な生活と人びとの命を脅かす悪しき力の蔓延をゆるすことにつながり、また神が備えてくださっている平和と自由を傷つけるものともなってゆくのです。

暑い日差しの中、平和を造り出す人々としてのあり方について、今一度、思い巡らしてみましょう。

洗礼・堅信

アンデレに導かれて

アンデレ 永根康太郎

この四月九日に洗礼、七月二十三日に献信を受けましたアンデレ　永根康太郎と申します。北海道の父方の家系が代々クリスチャンで、私も幼少期から祖母と父によく教会に連れられ、お世話になっておりました。洗礼は受けず教会に連れられていたのも九歳の頃まででしたが、この度三十一歳で信徒となることを決意致しました。私は現在商社で食料関連の仕事に携わっており、二〇二一年秋よりロシアに赴任しておりました。初めて現地でロシア正教の教会に行った際、壁に敷き詰められた金箔のイコンと全員が立ち尽くした空間、充満するお香の香り…などの自分の知る教会との差に異様な雰囲気を感じました。一方で、実際に現地で生活してみて、想像していたよりも遥かに厳しい生活と、市民が帝政・共産党など支配層が変わってもずっと抑圧されていた千年以上の歴史を重ね、人生で初めて「祈りたい気持ち」に共感致しました。

その後、ロシアがウクライナに侵攻し、緊急帰国を余儀なくされました。自分が長く考えて選んだロシアでのビジネスへの夢が、政治的理由によりひっくり返り、「人生ではどうしようもないことが起きる」ということを認識させられ、一時は打ちひしがれました。そんな折、たまたま懐かしい聖アンデレ教会に足を踏み入れ礼拝に参加した時、不確実な世の中で、「祈る」（時にはすがる）ことが心の支えになるのではないか、と感じた次第です。

洗礼名は、教会の冠するお名前にて大変僭越ではございますが、アンデレとさせて頂きました。自分の誕生日と同じ十一月が聖アンデレの日であることに加え、アンデレが後の東方正教会の始祖であることから、ロシアでの大きな経験を忘れずに人生を歩んでいきたいと考えこの名前を選びました。信徒としては未熟ではございますが、まずは毎日の祈りと聖書を読むことから、信仰生活を深めていきたいと考えております。今後とも何卒どうぞ宜しくお願い致します。

教会にJAZZが来た

JAZZコンサート実行委員会　ヨセフ　藤波勝久

二〇一九年に十九回目のコンサートを実施して、さて次が二十回だと思ってから四年、今年の六月二十四日（土）やっとコンサートを開催することができました。

今回は、いつも出演していただいている竹下ユキさんの予定が合わず、ビッグウイングジャズオーケストラの単独開催となりましたが、日髙先生に急遽出演をお願いして、オリジナルのJAZZピアノの演奏をしていただきました。久しぶりの開催でもあり、チケットが予定通り販売できるかどうか大変心配いたしましたが、おかげさまで、予定数をすべて完売し、当日は満席となりました。ご来場のお客様には、素晴らしいJAZZの音楽を聴き、ワインを飲んで、楽しい教会の夜を満喫していただけたと思います。また当日の、会場設営・売店・受付・警備など大勢の皆様のご奉仕に心から感謝申し上げます。今回の収益金は全額、教会を通して、社会奉仕の為に捧げられます。また来年も開催したいと思います。皆様ありがとうございました。

わたしの演奏スタイル

執事 トマス 日髙馨輔

わたしは楽曲を楽譜の通りに弾くことをあまり致しません。元を辿れば、幼い頃からフランス音楽に親しみ、学生時代はロシアから亡命したポーランド人ポール＝ヴィノグラードフ先生に学び、日米で作曲理論と実践を重ねたことが基礎となっており、ある時から即興演奏が自分の演奏スタイルの一部になっています。

さて、「演奏時間十分でお願いします」。これがジャズコンスタッフF氏からのご要望でした。この要望に沿うべく準備を進めることになります。え？即興演奏に準備が有るの？と思われるかも知れません。有りますとも。先ずテーマを何にするか。お気づきの方も多かったと思いますが、今回は聖歌五六六番「わが心　たたえよ主を」をモチーフとしました。次に当日の演奏楽器（聖堂のグランドピアノ）の魅力をどう伝えるか。ピアノの向きや音の伝わり方を確認し、ビッグウィングの演奏曲目を確認し、どうすれば効果的な演奏になるか考えながらリハーサルを進めました。

本番ではその場の雰囲気・お客様の反応を感じながら演奏します。紡ぎ出す音楽が神への祈りであることは勿論ですが、何といっても、お客様に楽しんでいただくこと。皆様の熱や喜びが伝わる時、それらはわたしの力に変えられ、かけがえのない時を皆様と共有することとなるのです。ご来場の皆様、スタッフの皆様、お祈りくださった皆様、有難うございました。感謝。

撮影者　町田勝彦氏

◇毎主日 週報が発行されています。
教会ホームページでご覧いただけます。
FAX・郵送をご希望の方は事務所までご連絡ください。

◇牧会訪問、自宅や病床での陪餐、ご家族・少人数での礼拝や記念式への参加を希望される方は教会までご連絡ください。

◇教会への月約献金・感謝献金は郵便局・ゆうちょ銀行をご利用ください。
郵便振替　００１６０－１－９１１６８
聖アンデレ教会

◇主日礼拝・平日の公祷をライブ配信しています。
教会HPからご覧になれます。

創立記念礼拝

共に祈ること

マルコ 立花直明

六月に入りコロナ禍に伴う礼拝の制限の多くが解除され、三年ぶりにジャズコンサートが開催されました。そして十月にはバザーの再開が予定されています。再び教会の日常が戻ってくることが大変嬉しく、神様への感謝の気持ちで一杯です。

思い返すと二〇二〇年一月に日本でも新型コロナウイルスの感染者が発生し、聖アンデレ教会も主日の礼拝に多くの信徒が集うことが無くなりました。新型コロナウイルスの感染状況に応じて、この三年間はオンラインでの礼拝、少人数のグループでの礼拝再開とできる範囲で主日の礼拝を守ってきましたが、コロナ禍以前とは大きく変わってしまいました。特に神様に祈りをささげるとき、神様を通して世界の人々と繋がりを持ち、共に祈りをささげているのだと思いながら、どこかで寂しい気持ちも隠せませんでした。それは当たり前だと思っていた聖アンデレ教会に主日に集い、親しい方、初めていらっしゃった方、高校生のころからの教会の仲間の顔を直に眺めながら礼拝を守り、共に祈りをささげるといった自分にとって何十年も変わらない信仰の習慣が途絶えてしまったことの寂しさだったのだと思います。

先日、東京教区の集まりがあり、抱えている課題の解決を話し合ったとき、ある司祭より課題解決のためにまず祈ってください。神様のメッセージを聞いてください。そして教会の皆さんと共に祈り、神様のメッセージを共有してください。きっと神様から課題解決の道と力が与えられ、皆さんで協力して課題に立ち向かうことができると思いますとのお話がありました。この話を聞いたとき、まず祈ることの大切さを強く感じるとともに、コロナ禍にあって独りで祈ることに慣れ、共に祈るといった気持ちが少し薄くなっていたことに気づかされました。教会生活の日常が戻ってくる中で、聖アンデレ教会で再び多くの方々と共に礼拝をお捧げするとともに、その日集えなかった方のお顔も覚えながら共に祈っていることを強く感じたいと思っています。

6月4日創立記念礼拝の様子

礼拝奉仕について

「代祷」

執事 スザンナ 中村真希

代祷の「代」はどういう意味でしょう？会衆の「代表」が祈るということでしょうか？違います。他者に「代わって」教会が祈る、という意味です。これは教会共同体全体の祈りで、元々はINTERCESSION、「執り次ぎ」という意味です。「全公会のため、また世界のために祈りましょう」という呼びかけに注目しましょう。礼拝の中で私たちは自分たちのためだけでなく、世界に神様の平和と正義が実現するように願い、神の民が整えられ遣わされるために祈ります。

元来執事（Deacon）は教会と世界とを執り次ぐ役割を持っています。ですから最初の呼びかけは司祭ではなく執事が行います。また、私たちが今使っている九十年版祈祷書の大きな変革は、あらゆる場面において信徒の役割を増やしたことでした（※教会問答「神の民とは何ですか」参照）。教会は何よりもまず信徒の群れであり、長く続いた聖職中心主義を捨て、信徒の理解と学び、主体性と積極的な参加が求められています。ですから代祷の各項目を信徒が祈ることは重要です。聖職が司式する聖奠の執行において、信徒が担う大切な働きだからです。

そして各項目の内容にも是非関心を向けてください。教会が私たち共同体、遣わされている地域、そして世界とのつながりの中でこの祈りを唱えていることがよく分かります。祈祷書の文言は誰でも平等に唱えられるようになっていますが、自分の言葉でお祈りを足しても構いません。その際、具体的すぎず普遍的すぎずというバランスは必要かもしれません。しかし大切なのは祈りの上手下手ではなく、心を込めて神様にこの執り次ぎのお祈りをお献げすること。真剣にこの祈りに心を合わせて「主よ、お聞きください」と応えてゆきましょう。

聖アンデレ教会の足跡第五回

２００８年
重度心身障害者施設「はんな・さわらび療育園」におむつを届ける

１９６８年（昭和４３年）６月、群馬県榛名に社会福祉法人「榛桐会」（しんとうかい）により定員５０名で開設された施設に、２００８年７月、２１名で訪問し、聖アンデレ教会の有志で作られた晒のおむつを持参しました。長い晒の布を皆さんでカットして、家に持ち帰っておむつに仕立てました。
園内には、５歳から６０歳までの方々が献身的に介護をされており、肌触りの良い晒のおむつは大変感謝されました。１日に５０００枚使用されるともお聞きしました。
現在は紙おむつに変わり、２０２３年には、１０４人の方が入居されています。又榛名には聖公会の方々が多く入居されている社会福祉法人、新生会の、養護老人ホーム、特養他多くの施設、そして教会もあり、入居されている皆さんと歓談のひと時を過ごし、教会でお祈りも出来、実りある楽しい訪問の１日でした。

聖アンデレ教会将来計画信徒ワークショップ開催報告

ポウリーン 田口知子

「前庭ならびに西側崖地プロジェクトチーム」では、六月四日の聖アンデレ教会創立記念日に、アンデレホールにて将来計画信徒ワークショップを開催いたしました。今年の二月の堅信受領者総会にて報告した内容を再確認し、皆さまと一緒に考える時間を持ちました。総勢四十五名の参加があり四つのテーブルに分かれて、チームメンバーがファシリテーターに入って皆様の意見をお聞きしました。出たご意見はその場で付箋に記入し、模造紙に貼って最後に発表いただきました。やはり聞くだけでなく、自ら話したり、書いたり、という参加型のワークショップは、皆様の理解が深まり、リアル交流会にもなって、にぎやかな充実したひとときになりました。ご参加いただいたみなさま、本当にありがとうございました。ワークショップで出た意見を、少し共有してみたいと思います。

まず、西側崖地の安全対策は優先して行うべき、という意見は皆で共有できました。建築はA～Dの四案があることから、C案の新築案か、今の建物を利用するA案か、主に二つの方向で意見が分かれました。また、資金調達の方法として教区事務所の建つ土地を定期借地に供出する可能をご説明したところ、土地の活用はアンデレだけの問題ではないので、多くの人を巻き込んで慎重に議論すべき、というご意見が出ました。

将来計画として、この土地が近隣の憩いの場になるような活動が大切という意見や、収益性のある建物を建てるべき、という意見も出ました。このようなワークショップを重ねるなかで、皆の納得する方向が見つかれば良いと思います。建築の話では教会の事務室、牧師室と礼拝堂は近いほうがよいという意見、崖を利用した墓地や緑道をつくる案など、具体的なアイデアも出ました。また、税の問題や事業性、借地の維持管理の問題など、専門家の意見を聞く機会も必要、という意見もありました。崖や建物のメンテナンスも大切なテーマで、課題は尽きません。しかし、皆で一緒に考えることで多様な課題を共有し、進むべき方向が見えてくるとよいと感じます。

プロジェクトチームとしては、今年は西側がけ地の対策に焦点を絞り、法面対策工事のための地盤調査を行っています。調査結果をふまえて、またご報告会を開催しますので、ぜひご参加いただければと思います。引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。

6月4日
ワークショップの様子

聖書を学ぶ会

執事 スザンナ 中村真希

六月より、対面での「聖書を学ぶ会」がリニューアル・オープンいたしました。第一・第三水曜日の午後一時より、それぞれ旧約聖書と新約聖書を学んでいきます。担当は旧約が中村執事、新約が下条司祭です。聖書の読み方、解釈は人によってさまざま、どこに重点を置くのかも読む人によって異なります。旧約聖書は当面「旧約聖書の世界を紹介する」を基本テーマに、本文も読みながら、その世界観、人間観、伝えたかった信仰がどのようなものかについて、学び、考えていきたいと思っています。新約聖書は同様に聖書の世界観や基本となる背景を紹介しながら、マタイによる福音書に焦点を当て、読み進めていきます。

旧約・新約ともに、大切にしたいことは、聖書をただの知識にせず、自らの信仰生活と結びつけ、生きたメッセージとして受け取ることができるように、一人一人の「ライフ」（生命、生活、人生）を共有しながら聖書と向かい合う、ということです。受け取ったことを言語化し、分かち合う時間も大切にしたいと思います。共にみことばに聞き、みことばに励まされ、あるいは驚かされながら、信仰者として歩んでいくヒントと出会う機会になればと願っています。多くの方の参加をお待ちしています。（事情により対面で参加できない方にはZOOMでの参加も受け付けますのでご相談ください。）

なお、他の時間帯や内容の学びの会について希望があれば検討してゆきます。教役者までご連絡ください。